小学校外国語科・外国語活動におけるCLILの充実

１．担当者（代表者）　*大森有希子　**ホール・ジェームズ
*遠藤勇太　白石円　松舘慧　遠藤真央　楢木航平　菅原純也
*所属　岩手大学教育学部附属小学校　**所属　岩手大学教育学部英語科

（令和２年３月４日受理）

１．はじめに

本校では昨年度から，CLILの単元開発をしようと研究を進めてきた。CLILとは，Contents and Language Integrated Learningの略で，内容言語統合型学習のことである。この学習方法は，教科の内容と英語運用能力の両方を統合させながら学ぶことができる。また，暗記や理解に偏ることのないバランスのとれた多様な学習活動を行うことができる。

我々は，CLILが４月から施行される学習指導要領で外国語科・外国語活動の授業づくりにおいて重要視されている「目的・場面・状況の設定」に，大きく寄与できる学習方法だと考える。

本プロジェクトでは，その多様な学びが展開できるCLILについて、小学校外国語・外国語活動の充実を図るものである。

２．方法

（１）研究計画

４月　学部とのカンファレンス
４月～７月　第１期授業研究（実践と開発）
７月　岩大附属小全体研究会
１０月　学部とのカンファレンス
１１月　附属小OPEN FORUM
１２月　外国語科授業研究発表会
９月～１２月　第２期授業研究（実践と開発）
２月第16回全国小学校英語活動研究会山梨大会

（２）研究方法

CLILを用いた単元開発と実践を重点として，本プロジェクトを推進した。

３．結果

（１）本校のCLILについて

わが校では，小学校段階を考慮して以下のようにCLILを捉え直し，研究を進めた。

①contents
外国語活動及び外国語活動の学びにおいて，他教科と関連させた内容であること。
②communication
学習者同士のコミュニケーション活動が学びの文脈に位置づいていること位置づいていること。
③cognition
学習者の思考に沿うように，自由度のある英語運用を行うこと。
④culture
自由度のある英語運用を支える単語や表現方法の習得も合わせて行うこと。

①contentsについて

単元構成をカリキュラムマネジメントの視点から捉え，同時期に同じような目標や内容の活動，育みたい資質能力で構成した。

例えば，社会で学んだ偉人について英語で紹介できないかと考えたり，家庭科で学んだ３大栄養素を用いてオリジナルメニューを考えたりするような単元を構成した。

②communicationについて

外国語教育の中で，英語運用のためだけに学びを行うことがある。そうではなく，目的・場面・状況を教師が設定し，目的をもって児童が英語運用できるように単元を設定した。

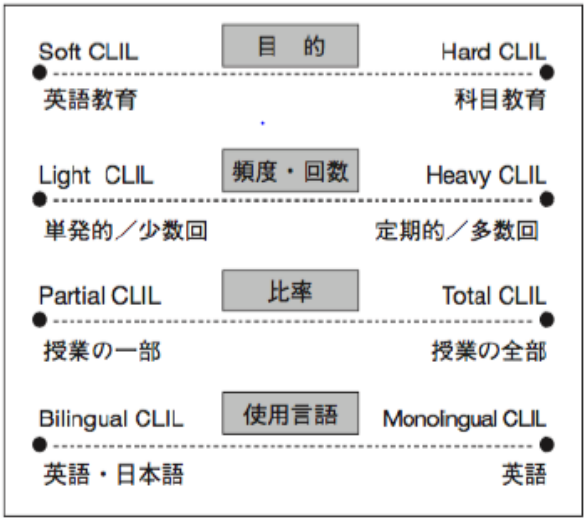
③cognition について

外国語活動及び外国語における言語活動では，定型表現のやりとりに加え，目的・場面・状況に応じて自由度のあるやりとりが繰り広げられることが求められている。それは，児童の思考力・表現力・判断力がそこで発揮されるからである。学びの中で，自由度のあるやりとりが生まれるようなアクティビティを開発し，設定した。

④culture について

自由度のあるやりとりをするためには，基礎となる英語の知識及び技能が必要不可欠である。この知識及び技能を高めることは，やりとりの経験を積んでいく上でも重要である。

また，上智大学文学部英文学科池田真准教授は以下のように CLIL についてこのように説明している。



我々は小学校段階という実態に合わせ，

ア　Soft CLIL（英語教育を目的とした授業）

イ　Light CLIL（教科統合する単元を選び，少数回行う。）

ウ　Partial CLIL（毎時間ではなく，適切な時間に CLIL を用いた授業を展開する。）

エ　Bilingual CLIL（必要に応じて英語と日本語を使い分けながら授業を展開していく。）

ア　Soft CLIL

本校では，CLIL を用いて学習を展開する目的を，「英語教育」とする。科目教育を目的としてしまうと第二言語である英語で，算数や理科の授業を展開し，理解させ，評価することになる。これでは，指導者の英語力も必要であり，また児童も英語を理解していることが前提となってしまう。そうではなく，他教科と統合しながら英語運用をメインに学習を進めることが小学校段階では効果的だと感じる。

イ　Light CLIL

頻度は，学期に１～２単元を目標として行う。カリキュラムマネジメントの面で工夫が必要であり，他教科の理解もままならないまま英語と統合してしまうのは，児童にとって有効ではないと考えたからである。

ウ　Partial CLIL

単元全てを他教科と統合して行うことができるのは，例えば総合学習など汎用性の高い教科では可能だと考える。しかし，多くの場合，表現に慣れ親しむ時間が必要だったり，やりとりの経験を積ませることが必要だったりと毎時間教科統合するのは難しい。単元の中の１～２時間を教科統合するのが望ましいと考える。

エ　Bilingual CLIL

All English の授業が理想ではあるが，知識の少ない中学年は特に厳しいものがある。活動のルールの説明等は日本語で行い，全員が不安感を抱くことなく活動に入れるようにする。

（２）授業実践

３年つばき組「What’s this?　これなあに？」

①contents

理科「こん虫をしらべよう」

「チョウを育てよう」

本単元では，、教師が行う Small　Talk の場面で理科で学んだ生き物やそれらのたまご，チョウの育て方などを想起しながら教師の「What’ s this?」に答えていく。また，教師のモデリングを通して，児童のクイズ制作の際に理科で学んだことを生かしてクイズを作成できることに気付かせるという狙いもある。

②communication

単元のゴール　クイズ大会をしよう

身近なものを使って，クイズが作れるということに気付かせ「つばき組クイズ大会を開こう！」という単元のゴールを示す。様々なクイズの種類の中から選択したり，漢字の画数や図工の色などを使ったりしながら様々なクイズを考えて試していく。

③cognition

３年生のまとめの単元ということで「What’s this?」「It’s ○○.」のやりとりだけでなく，自然に「Hint,please!」や「That’s right!」等反応の表現もクイズ大会の会話の中に出てくるようにモデリングをし，やりとりを楽しめるようにしていく。

④culture

主に small talk 中に子供達とやりとりをし，表現に慣れ親しませる。また，答えるときに単語だけで答えてしまう児童がいた場合は，教師が正しい表現を言い，自然に身に付くように促す。

Let’s Try!のデジタル教材に含まれている Let’s chants!も使用するが，それだけでなくオリジナルのリズムで行ったり，単語を様々入れ替えたりして表現に慣れ親しませる。

	学習内容
1	スリーヒントクイズに答え，身近なものでクイズが簡単に作れることを知り，単元のゴールを設定する。
2	クイズに必要な表現を知り，慣れ親しむ。教師の出す新たなクイズに挑戦し，クイズには様々な出題方法があることを知る。
3	教師の出す新たなクイズに挑戦しながら表現に慣れ親しむ。チームのみんなでクイズを考えてプレクイズ大会として子ども同士でやりとりをする。
4	前時のプレ大会をうけて，相手がワクワクするようなクイズとはどのようなものかもう一度思考し，クイズを作る。
5	考えたクイズを出し合う，クイズ大会を開催する。

考察

教師側から提示するクイズは理科の学習内容と統合したものに絞ったが，児童がクイズを作成するときは，国語・算数・音楽・図工など様々な教科の学習内容を取り入れて意欲的にクイズ大会を行うことができた。今回は，クイズの内容に焦点が当たっていたので，「What’s this?」「It’s ○○.」以外のやりとりを広げることが難しかった。クイズの内容ではなく，もっとやりとりの上手なチームをピックアップして何度もモデリングさせてやりとりの幅を広げてあげることが必要だったと考える。

クイズに答えることで，様々な教科内容を改めて確認できたり，新たな知識を得たりすることはできたが，英語運用を用いたやりとりにはまだまだ課題が残る。

５年うめ組「What would you like?料理・値段」

①contents

家庭科「食べて元気に　３つの食品のグループとそのはたらき」

外国語科「What would you like?料理・値段」（We Can 1 Unit 8）

本単元では，家庭科で学んだ３つの食品グループについて考えながら，家族のためにメニューを選択していく。

②communication

単元のゴール　家族のためにオリジナルメニューを考えること

家族が健康でいられるような食事を考えて提供できるように，家庭科で学んだ学習内容を生かしながらメニューを選択していくことがゴールであることを確認する。

「What would you like?」「I would like to ○○.」に慣れ親しめるように，店員と客に分かれてやりとりするなど，これらの表現を使う場面を設定していく。

③cognition

家庭科との関連で，「おもにエネルギーのもとになる食品」が多く含まれる料理には黄色，「おもに体をつくるもとになる食品」が多く含まれる料理には赤，「おもに体の調子を整えるもとになる食品」が多く含まれている料理には，緑で色付けし，児童がメニューを考える際のヒントとなるようにする。バランスの取れたものを選択することが大切だと感じさせたい。

④culture

単元のゴールを達成するまでに，基本表現を使うアクティビティを何度も取り入れていく。しかし，表現の他に，メニューとなる単語も数多くある単元である。モジュールを使って単語を使うようなゲームを何度も行い，料理とその単語名が一致するようにしていく必要がある。

	学習内容
1	様々な食べ物が世界にはあることをしり，単元のゴールを設定する。
2	食べたいものを尋ねたり答えたりするようなアクティビティを行い，その表現に慣れ親しむ。
3	値段の尋ね方や答え方を知り，値段についてのインタビューゲームを行う。
4	グループで，３つのグループを考えながら，オリジナルメニューを考える。
5	家族に合わせたオリジナルメニューを考える。
6	家族のために考えたオリジナルメニューを発表する。

考察

家庭科的な思考は十分に働いていたと感じる。まさに英語で家庭科の学習内容を再確認し，メニューの栄養バランスを考え抜くことが出来ていた。

しかし，児童の自由度の英語運用にはまだまだ課題が残る。「What would you like?」「I’d like to ～.」以外の英語がまだまだ足りなかった。英語の知識の持ち合わせ不足に加え，自由度のあるやりとりが必要な場面設定が甘かったと感じる。場面設定は今後の大きな課題である。

３年生の授業，５年生の授業ともに，

ア　Soft CLIL

イ　Light CLIL

ウ　Partial CLIL

エ　Bilingual CLIL

を用いて単元構成をしたり，授業展開したりした。英語教育を目的としたり，日本語と英語を使い分けりことで児童にとって無理のない学びとなった。理想は，Hard CLIL を展開していくことだが，やはり児童の実態に合わせることが大切だと感じる。

４．その他の地域貢献活動

外国語授業研究会

期　日　令和元年１２月１４日（土）

内　容　授業公開・授業研究会

岩手大学教育学部英語科准教授

ホール・ジェームズ先生のワークショップ

様　子

休日にも関わらず，県内外から６０名を超える参加をいただいた。外国語科・外国語活動への本実施に向けて，高い関心が向けられていることがうかがえる。

参加者からは，好意的な意見が多く届いた。こういった授業公開が日々の不安を取り除く一つの要素となっているものだと考えられる。

研究を通して，明らかになったことを発信したり，お互いの悩みを共有したりできる大切な地域貢献活動と考えている。

５．まとめ

成果

・CLIL を用いた単元構想について，児童の実態や教科の学習内容に応じて内容を考えることができた。

・子供たちの学びの文脈に，「目的・場面・状況」をしっかり位置付けるためには，CLIL はとても有効な方法だと感じた。

・教科内容を再確認しながら，英語の表現も慣れ親しむことが出来，児童の意欲の向上に。つながった

課題

・次期指導要領や教科書と対応した年間指導計画を作成し，より計画性のある学習を進めていく必要がある。

・英語運用に重きを置くのか，それとも教科内容に重きをおくのか授業者が立場をはっきりさせて明確な目標の下，行っていく必要がある。

謝辞

本研究を進めるにあたり，ご協力いただいた各校の子供達，先生方に感謝いたします。

また日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂いた附属小外国語科研究部の皆様に感謝いたします。